

しんじゆうてんのあみじま やまとや  
心中天網島 大和屋の段

恋情け、こゝを瀬にせん蜷川、流るゝ水も、行き通ふ、人も音せぬ丑三つの、空十五夜の月冴えて、光は暗き門行灯、大和屋伝兵衛を一字書き眠りがちなる拍子木に番太が足取り千鳥足

「ご用心／＼」

と声更けたり

「駕籠の衆いかう更けたの」

と上の町から下女子、迎ひの駕籠も大和屋の潜りぐ

はらぐはらつゝと入り

「紀の国屋の小春さん借りやんしよ、迎ひ」

とばかりほの聞こえ、後は三つ四つ挨拶の

ほどなく潜りによつと出で

「小春様はお泊りぢや。駕籠の衆すぐに休ましやれ。

ア、言ひ残した、これ花車さん、小春様に気を付け

て下さんせ。太兵衛様への身請けが済んで、銀受け取つたりや預りもの。洒過ごさせて下さんすな」

と門の口から明日待たぬ、治兵衛小春が土になる、種蒔き散らして帰りける

茶屋の茶釜も夜一時休むは八つと七つとの間にちらつく短檠の、光も細く更くる夜の、川風寒く霜満てり

「まだ夜が深い送らせましよ。治兵衛様のお帰りぢや小春様起こしませ。ソレ呼びませ」

と亭主が声

治兵衛潜りをぐはさと開け

「コレ／＼伝兵衛。小春に沙汰なし耳へ入れば、夜明けまで括られる。それゆるゑよう寝させて抜けて去ぬる。日が出てから起して去なしや。我ら今から帰

るとすぐに、買ひ物の為京へ上る。大分の用なれば、中払ひの間に合ふやうに帰るは不定、最前の銀で、

そなたの算用合ひも仕舞ひ、河庄が所へも後の月見の払ひと言うて、四つ百五十匁請け取り取つてたもらうしと、福島さいえつぼうの西悦坊が仏壇買うた奉加ほうが、銀一枚回向しやれと遣つてたも。そのほかにかゝり合ひはハアそれよゝゝ、磯市いそいちが花銀五つ、こればかりぢや仕舞うて寝やれ。さらばゝ戻つて逢はう」とふた足み足行くより早く立ち帰り

「脇差忘れたちやつとゝ。なんと伝兵衛。町人はこゝが心易い。侍なればそのまゝ切腹するであろの」

「我ら預つて置いてとんと失念。小刀も揃うたと渡せば

しつかと差し

「これさへあれば千人力。もう休みやれ」と立ち帰る

「追つ付けお下りなされませ。ようござりまもそこゝに、後はくろゝをこつとりと、物音もな

く鎮まれり

治兵衛はつつと去ぬる顔、また引つ返す忍び足、大和屋の戸に縫り、内を覗いて見るうちに、間近き人影びつくりして、向かひの家の物蔭に過ぐる間暫し身を忍ぶ

弟ゆゑに気を砕く粉屋孫右衛門は先に立ち

跡に丁稚ていぢの三五郎が、背中に甥の勘太郎連れ、行灯

目当てに駈け来たり、大和屋の戸を打ち叩き

「ちと物問ひませう。紙屋治兵衛はるませぬか。ち

よつと逢はせて下され」

と呼ばはれば

「さては兄貴」

と治兵衛は身動きもせずなほ忍ぶ

内から男の寝ほれ声

「治兵衛様はまちつと先に、京へ上るとてお帰りなされた。こゝにはござらぬ」

と重ねてなんの音なひも

涙はら／＼孫右衛門

「帰らば道で逢ひそなもの、京へとは合点がゆかぬ。マア氣遣ひで身が震ふ。小春を連れては行かぬか」と胸にぎつくり横たはる、心苦しき堪へかね、また戸を叩けば

「夜更けて誰ぢや、もう寝ました」

「ご無心ながらマ一度お尋ね申したい。紀の国屋の小春殿はお帰りなされたか。もし治兵衛と連れ立って行きはなされぬか。ヤ、ヤ、なんぢや、小春殿は二階に寝てぢや。ア、先づ心が落ち付いた。心中の念はない。どこにかぐんでこの苦をかける。一門一家親兄弟が、固唾<sup>かたす</sup>を呑んで臍腑<sup>ぞうふ</sup>をもむとはよも知るまい、舅の恨みに我が身を忘れ無分別も出やうかと、異見の種に勘太郎を連れて尋ぬる甲斐もなく、今まで逢はぬは何事」

とおろ／＼涙の独り言

隠るゝ間の隔てねば

聞こえて治兵衛も息を詰め、涙飲み込むばかりなり「ヤイ三五郎、阿呆めが夜々失せるところほかに知らぬか」と言へば

阿呆は我が名ぞと心得て

「アイ、知つてゐれど、こゝでは恥づかしうて言はれぬ」

「知つてゐるとはサアどこぢや、言うて聞かせ」

「聞いた後で叱らしやんな。毎晩ちよこ／＼行くところは、市の側の納屋の下」

「大戯けめ、それを誰が吟味する。サア来い、裏町を尋ねてみる。勘太郎に風邪引かすな。ア、ごくにも立たぬ父めを持つて可哀や冷たい目をするな。この冷たさで仕舞へばよいがひよつと憂い目は見せま

いか。憎や〜」

の底心は、不憫々々の裏町を

「いざ尋ねん」

と行き過ぐる

影隔たれば駆け出でて、跡懐かしげに伸び上がり、

心にものを言はせては

「十悪人のこの治兵衛。死に次第とも捨て置かれず、

あとからあとまでご厄介、勿体なや」

と手を合はせ、伏拝み〜

「なほこの上のお慈悲には、子供がことを」

とばかりにて暫し涙に咽びしが

「とても覚悟を極めし上、小春や待たん」

と大和屋の、潜りの隙間差し覗けば

内にちらつく人影は

「小春ぢやないか」

「待つて」

と知らせの合図のしはぶき

「エヘン〜」

かつち〜えへんに拍子木打ち交せて、上の町から

番太郎がくる〜たぐる風の夜は、せき〜廻る

「火の用心。ご用心、ご用心」

も人忍ぶ、我にはつらき葛城かつらぎの、神隠れしてやり過

し、隙を窺ひ立ち寄れば、潜りの内からそつと開く

「小春か」

「待つてか、治兵衛様早う出たい」

と気を急げば、急くほど廻る車戸の

『開くるを人や聞き付けん』と、しやくつて開くれ

ばしやくつて響き、耳に轟とどろく胸の内

治兵衛が外から手を添へても

心震ひに手先も震ひ、三分四分五分一寸の、先の地

獄の苦しみより、鬼の見ぬ間とやう〜に開けて嬉

しき年の朝

第一回 花の会

小春はうちを抜け出でて

互いに手に手を取り交はし

「北へ行かうか」

「南へか」

西か

東か行く末も心の早瀬蜷川流るゝ月に逆らひて足を、  
はかりに

はなくらべしきのことぶき あま  
花競四季寿 海女

誰にか見せん沢辺なる、花紫の色深く蒼を筆と杜  
若

卯の花月に移り移ろふ枝々の、花ぞちりぐ塵塚に、  
積もるも景色面白や

月雪花を手に触れて、いざ慰まん調べかな

もとより

鼓は浪の音、千里もひゞくさつささど浪。女浪男浪  
が打ち寄せく、青海立つ浪高浪四海波、どうく  
どう、磯うつ浪にゆられもまれて、さらりく、さ  
らさらさら、松の嵐か、月の出汐に雲が追ひ出て、  
出てくるくくくくくくくくくく。うつや調べ  
の拍子につれて

面白や

汐馴れ衣身に添へて、唐へも運ぶ磯の浪。汐の満干に

かるまでもなし、沖に漂ふ磯千鳥

思ひしことは仇し野の、露と消えんと思ひしに、不

思議の縁に逢ひそめし、粹はさうしたもののかいな。

それでもあんまりつんくくな、エ、憎てらしい顔

わいな。夕べも今宵もひぞらんす。口説しかけて去な

うでな。アレまたわしを泣かそでな。どうでもかう

でも去なしやせぬ

いまは二人が吸ひ付け煙草、きせるの煙立ちのぼる。

わしが思ひは富士浅間、のぼり

つめては上もなき

汐の干潟にな、一人鮑の片思ひ。浪のよるくもナ、

浮名を流す。サイナくその心はあさり貝